

都・建設予定地 生活記 (3)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

「どこまで行っても道だけは良いですね」と、オートリキシャーに乗った後輩が言った。「だけ」ということはない気がするが、大した反論が思い浮かぶわけでもない。とにかく、グジャラートの州都、ガンディーナガルの道はとても綺麗だ。僕らの乗るオートは階段井戸を目指している。それなりに有名な観光地になっているこの井戸は、町の外れ、「ローカル」を通り越してしまった場所にある。土埃が舞い、牛が平気な顔をして糞を垂れ流している。そんなところでも、ロードローラーがアスファルトを固めていて整備していた。

ご存知の方も多いと思うが、Vibrant Gujarat という非常に大きな投資誘致イベントが開かれたのは今年の頭だ。各国から様々な企業、重役が集まるグジャラート州を挙げての一大イベントだ。もちろん、何をするにも外見から入っていくインドの人たちが、のほほんとしているわけがない。僕のいる大学も会場の一つになっており、様々な準備が急ピッチで進んでいた。大通りから大学までの道、約3kmの電灯が欠けることなく灯るようになった。道そのものもあつという間に整備され、凹凸の多かった道にアスファルトを上から被せて平坦な道を作り上げた。勢い余ったらしく横断歩道も消え、道幅を整えるためなのか、路肩のたばこ屋も追い出された。一、二週間にしてグラウンドに巨大な会場が建てられた。それが電波を邪魔しているのか携帯回線の調子が悪くなった。警備面も万全で、大学に来ようとしたドライバーすら止められた。準備期間ですらそんな状態なのだから、会期中はもっとすごかったのだ。電波が悪いからと部屋から出て電話をしていると「名札がない」「何をしているんだ」「さっさと寮に戻れ」と色々言われるという、幽閉状態にあった。

ま、それはとにかく（もともと出不精だ）、このイベントに掛けるグジャラートのエネルギーは凄まじかった。インド人は外見を気にするが、その中身だって、決して負けてはいない。Vibrant Gujarat そのものだって大変なイベントだし、そこにかかる情熱も誇りも、彼らの胸のうちでメラメラと燃えていたんだろう。

ところで、なんで今更こんな年始の話題かと言えば、このVibrant Gujaratの飾り付けがまだ至る所に残っているからだ。いつも通りのインドだ。きっと片付ける気がない。あれからしばらくたった今、警備は反動で緩みに緩み、いつの間にかたばこ屋も戻ってきた。この雰囲気は結構好きだ。落ち着いた日常が戻ってきて、ついでに道もすっかり良くなった。この土地で良いのが道だけなのかは分からないけれど、今日もガンディーナガルはイ

ベントの余韻を残しながら、ちょっとずつ住みやすくなっている。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。